

大学名	筑波大学		
University	Tsukuba University		
外国人研究者	張根寿		
Foreign Researcher	JANG KUN SOO		
受入研究者	大倉浩	職名	教授
Research Advisor	OKURA HIROSHI	Position	Professor
受入学部/研究科	人文社会系		
Faculty/Department	Faculty of Humanities and Social Sciences		

<外国人研究者プロフィール/Profile>

国籍	韓国
Nationality	KOREA
所属機関	祥明大学
Affiliation	Sangmyung University
現在の職名	准教授
Position	Associate Professor
研究期間	2014. 12. 1-2015. 2. 28
Period of Stay	2014.12.1-2015.2.28
専攻分野	日本語学
Major Field	Japanese Linguistics



研究室にて

<外国人研究者からの報告/Foreign Researcher Report>

①研究課題 / Theme of Research

いわゆる「評価のモダリティ」表現に関する日韓対照研究

②研究概要 / Outline of Research

本研究では、事態に対する必要・義務の意味を表す「評価のモダリティ」に関する諸現象を分析した。分析の対象とする形式は、「しなければならない」「してはならない」「するほうがいい」「してもいい」のようなもので、各形式の意味・構文的な特徴を韓国語の形式と比較した。これらの形式群は「必要・当為・義務」など用語は異なるものの、モダリティを構成する表現形式であることは認められている。しかし、これらの形式群の有するモダリティな特徴は同質なものではない。たとえば、他のモダリティ形式と違って、独立度の低い仮定条件節で生じたり、前部要素と後部要素の間に副詞などの他の成分が入ったり、前部要素と後部要素の倒置ができる形式も確認できた。このような内部の構成要素の叙法性の強弱(独立度の違い)を反映するテストを用いて評価のモダリティ表現が表される諸現象を記述した。

③研究成果 / Results of Research

日本語と韓国語の「評価のモダリティ」形式に見られる特徴を比較分析した結果、いくつか共通的な特徴が見られた。一つ目に、評価のモダリティ形式は、叙法性の程度において、より強いものから弱いものへと連続している。これは「事態の選択の度合い」という意味的な性質と並行性をもつと考えられる。二つ目に、日韓の言語形式ともに、当為・必然性の程度の高い形式(しなければならない、しなければいけない、など)が当為・必然性の程度の低い形式(するほうがいい、してもいい、など)に比べ、叙法性の程度が強い。反面、日韓の言語形式における異なる特徴も観察された。日本語の形式の中では「しなければならない」が全部要素(なければ)と後部要素(ならない)の結合力がもっとも高い。それに比べ、韓国語の形式の場合は、単語としての結合力は日本語に比べ相対的に低いということが分かった。

④今後の計画 / Further Research Plan

今回の研究では「評価のモダリティ」の形式の中、前部要素と後部要素からなる複合形式の叙法性の強弱(結合力の度合い)に焦点を置いて分析した。しかし、これらの形式の叙法性をより明らかにするためには、関連する他の形式を含め、個別形式のもつ文法的な性質にどのような違いがあるかということをもっと詳細に分析していく必要があると思われる。また、日韓の両言語における形式の叙法性の違いについては、日本語のほうが韓国語に比べ叙法性が高いという現象を指摘するに留まっているが、その原因の究明については今後の計画としていきたい。

< 受入研究者からの報告/Research Advisor Report >

① 研究課題 / Theme of Research

いわゆる「評価のモダリティ」表現に関する日韓対照研究

② 研究概要 / Outline of Research

これまでは現代日本語だけに注目してモーダルな表現を考察してきたものを、張氏の母語であり、日本語とも文法面で類似性の高い韓国語の形式と比較対照することで、新たな視点や特徴の解明が期待された。来日前の準備も十分なものが、来日以後も日本での最新研究を吸収し、日本人研究者との情報交換、筑波大院生との議論などで多くの刺激を受けるよう勤めて、短期間ではあるが本人も積極的に活動し、研究が着実に深化した。

③ 研究成果 / Results of Research

「評価のモダリティ」に関わる諸表現形式を、叙法性の強弱によって連続的に位置づけるモデルを提示できたことは大きな成果である。それに関連して、諸表現形式自体の複合度の問題など、今後さらなる検討が必要である。また、韓国語の形式との対照によってこれらの見解が補強できるのか、あるいは修正が必要なのかも課題である。帰国後の日本語教育でも、今回の成果が活かされるはずである。

④ 今後の計画 / Further Research Plan

今後もメールや論文のやりとりによって研究を継続してゆくが、内外の学会の際に、来日あるいは訪韓して直接議論を深めることにも努めていく。また、今回交流のあった日本人研究者との共同研究の可能性も視野に入れていく。



受入教員の研究室にて



日本語学研究室の皆さんと